

「せとうち発見の道」企画展

「戦時中のくらしと瀬戸内市」

2021年6月1日（火）～8月29日（日）

瀬戸内市民図書館

8月15日は「終戦記念日」です。昭和20年（1945）8月15日、太平洋戦争が終わり、「戦後」のくらしが始まりました。戦時中は、戦地に赴いた人たちだけでなく、いわゆる「銃後を守っていた」日本国内の人たちも、苦しい日々が続きました。

戦争中や終戦直後の厳しいくらしを体験した人が少なくなる中、残されたモノや記録によって、戦時中のくらしの一端を再発見します。

◆戦時体制

昭和12年（1937）から始まった日中戦争、昭和16年（1941）から始まった太平洋戦争などで、日本は、主に、中国、アメリカ、イギリス、ロシアなどと戦争状態となりました。

昭和20年（1945）に無条件降伏をして戦争を終結するまでに、多くの人が犠牲となりました。戦時中は、「総力戦」を戦うために、国内でも戦時体制が強められ、くらしの大部分に戦争の影響が及びました。



邑久高等小学校児童体操（おくこうとうしょうがっこうじどうたいそう）

中隊教練（ちゅうたいきょうれん）のようす 昭和10年代（1935～44）か

現在、瀬戸内市民図書館と中央公民館が建っている敷地（瀬戸内市邑久町尾張）には、かつて「邑久高等小学校」がありました。学校で行われた「中隊教練」のようすです。

◆警防団（けいぼうだん）

戦時体制となり、「国土防衛」が叫ばれるようになると、「防空」の思想普及が図られ、各地域で防空体制が強化されていきました。学校などでは避難訓練や防空演習などが行われ、地域では「防護団」が結成され、訓練が行われました。

昭和14年（1939）からは、「防護団」と「消防組」が統合されて、防火防空一体の「警防団」となりました。



警防団用のヘルメット

旧牛窓民俗文化資料館資料
牛窓の警防団で使われたとみられる
ヘルメット



防毒面（ぼうどくめん）（隔離式）

旧牛窓民俗文化資料館資料
有毒ガスから目や呼吸器を守るためのもの。敵国からの有毒ガスによる攻撃を予想し、防空訓練などのために備えたものの、実際はほとんど使われなかったといえます。



ゲートル

旧牛窓民俗文化資料館資料
男性がズボンの上から足のすね部分に巻いて足を保護するもの。もとは陸軍兵のものですが、戦時中は、一般男性も中学生から日常的に巻くようになりました。

◆もんぺ・防空頭巾・千人針

戦時体制下では、男女とも服装の規制を受けました。「もんぺ」は、女性が身に付けたズボン式の衣服です。昭和17年（1942）に婦人標準服として着用が義務付けられました。「もんぺ」は、和服の上にもそのままはくことができ、防空演習や勤労働員などで活動するのに適していました。

女性や子どもは、外出するときには防空頭巾（ぼうくうずきん）を携帯しました。防空頭巾は、空襲から身を守るためにかぶるもので、多くは家庭で作られました。

「千人針（せんになんばり）」は、出征する兵士の「武運長久（ぶうちょうきゅう）」や無事を願い、布に千人の女性が1人1針ずつ縫い玉を作ったものです。



千人針（せんになんばり） 旧牛窓民俗文化資料館資料



防空頭巾（ぼうくうずきん）
旧牛窓民俗文化資料館資料



「戦時中大炎訓練」 防火教練のようす 昭和10年代（1935～44）か戦時中に邑久町内のある地域で行われた、防火訓練の際に撮影された写真とみられます。

出典：『終戦五十周年記念 平和への想い』（1995年、邑久町発行）

◆物資の統制と代用品

戦争の継続には、大量の物資が必要となります。戦艦や戦闘機、戦車、銃など兵器を製造するための金属類をはじめ、それらを動かすためのエネルギー、兵士の衣類に使う繊維類などです。

そうした軍需品の調達を優先するため、物資の生産や消費を政府が統制する「統制経済」が進められました。生活必需品が「配給制」となったのもそのひとつです。

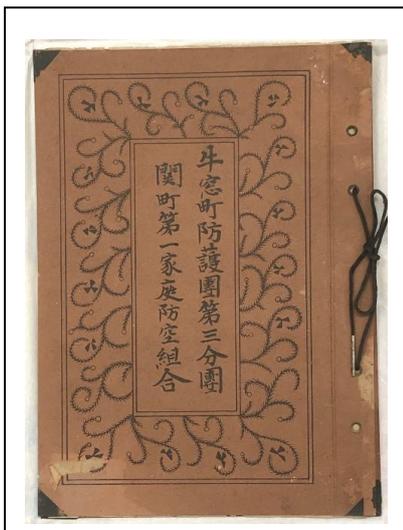
特に金属類は統制が段階的に強化され、生活用品に金属が使えなくなっていきました。また、金属の回収も強化され、一般家庭からも半強制的に金属製品が回収されました。

そうした統制とモノ不足により、さまざまな代用品が作られました。金属のかわりに陶器で作られた湯たんぽなどです。国内で自給できる陶磁器、木や竹、紙などが主な素材となりました。政策として代用品の普及が進められましたが、戦争末期には、人員や材料の不足で代用品の製造も困難になりました。



「国策湯丹保（こくさくゆたんぽ）」

旧牛窓民俗文化資料館資料
金属ではなく陶器製の湯たんぽ。



「うどん製造機」

旧牛窓民俗文化資料館資料
材料を押し出してうどんを作るもの。金属は使われていません。

家庭防空組合綴（かていぼうくうくみあいつづり）

旧牛窓民俗文化資料館資料
防護団の下に「家庭防空組合」が組織され、各家は必ずどこかの防空組合に組み込まれました。

◆牛窓防空監視哨（うしまどぼうくうかんししょう）

牛窓町牛窓閩町の通称「六万坊」という小高い丘に「牛窓防空監視哨」が設置されました。岡山県内 20 か所といわれる監視哨の中でも、牛窓は特に重要とされました。アメリカ軍機が確認されると、牛窓の監視哨から岡山県防空監視隊本部に電話で報告し、さらに、警報発令の権限をもつ、大阪の中部軍管区司令部に報告されることになっていました。

牛窓監視哨は、哨長 1 名、副哨長 3 名、3 班で構成され、各班に哨員が 6 名ずつ配置されました。一昼夜交代で、24 時間休みなく監視にあたりました。

昭和 20 年（1945）6 月 29 日の岡山空襲では、空襲の直前に牛窓監視哨で大型機の爆音を確認し、県防空監視隊本部に報告し、大阪まで通報されたにもかかわらず、警報が発令されないまま、岡山市内が焦土と化してしまっていたのでした。